

|                                    |              |                       |  |  |
|------------------------------------|--------------|-----------------------|--|--|
| 1-12                               |              | 主題                    | きっかけは車いす！ 車いすが運ぶ地域との明日   |  |
| 地域支え合い                             |              | 副題                    | チーム「車いす体験してみませんか」を通して  |  |
| 特養の役割                              |              |                       |  |  |
| 研究期間                               | 9ヶ月          | 事業所                   | 世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム  |  |
| 発表者：介護707副主任 中浜崇之・伊藤誉敏             |              | アドバイザー：日大文理学部 上之園佳子先生 |  |  |
| 共同研究者：上北沢ホーム チーム「車いす体験してみませんか」メンバー |              |                       |  |  |
| 電話                                 | 03-3306-5155 | メール                   | <a href="mailto:kamikitazawa@setagayai.or.jp">kamikitazawa@setagayai.or.jp</a> |  |
| FAX                                | 03-3306-1222 | URL                   |  |  |

|                  |  |
|------------------|--|
| 今回発表の事業所やサービスの紹介 | 世田谷区社会福祉事業団が運営する区立特別養護老人ホームです。施設自体が地域の一員であり、入所者100人は地域住民であるという認識の下、地域との接点を築きながら、地域に根差したホーム運営を目指しています。年間延3400人を超えるボランティア、近隣の小中学校から学びに来る年間約200人の児童生徒など、日常的に地域住民や関係機関と活発な相互交流を行っています。 |
|------------------|--|

|   |
|---|
| <p>《研究前の状況と課題》</p> <p>①利用者はじめ地域に対して「頼りになるホーム」になることをサービス目標にしている。</p> <p>②個々の職員は、利用者へのケアには努めているが、地域貢献への意識自体がまだ希薄である。</p> <p>③職員が地域に出て、介護に関する活動をする機会は殆どない。</p> <p>③職員は毎日多数のボランティアと交流がある。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>いつも世話になるボランティアたちが住んでいる地域で、直接自分たちがお返しできることはないか。役に立てることはないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たち職員が地域に出て直接役立ちたい</li> <li>・介護のプロとしてできることを行いたい</li> <li>・理屈だけでなく実際の体験により伝えたい</li> <li>・高齢者だけでなく広く区民と関わりたい</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>職員が地域に出ていく方法の一つとして、車いす体験を考えた。</p> |
|---|

|   |
|---|
| <p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>1 車いす体験を特養職員が行うことによる目標として、次の四点を挙げた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①地域住民や組織と顔の見える関係を築く</li> <li>②地域住民の介護ニーズに直接応える</li> <li>③介護について関心をもっていただく</li> <li>④特別養護老人ホームの存在や役割を知っていただく</li> </ol> <p>2 期待する成果として、次の四点を挙げた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①実施にあたってのプロセスを通じて、地域住民や組織と特養職員が、直接交流する機会をもつことができる。</li> <li>②車いすに「触れる」「乗る」「押す」という体験を通して、参加住民が、車いすや高齢者の暮らしなどに関心を持つきっかけになる。</li> <li>③住民の介護等に対する質問や疑問に直接その場で具体的に答えることができる。</li> <li>④地域に出ていく方法として、車いす体験が有効か否かの検証ができる。</li> </ol> |
|---|

《具体的な取り組みの内容》

09.7 の納涼祭で「車いす体験コーナー」を初めて企画、実施。

09.10 日大文理学部学園祭「車いす体験コーナー」でホーム介護職員が応援協力。

09.12 車いす体験の意義について検証。その上で継続的に実施できる方法について協議。

10.4 車いす体験講座を、上北沢ホームの地域貢献事業として位置づけることを決定。

10.4 職員提案によるチーム「車いす体験してみませんか」参加呼びかけのポスター掲示

10.5 チーム「車いす体験してみませんか」発足。当初メンバー25名。(介護、看護、生活相談、機能訓練、事務)

10.5 地域の町会長会議に出席、チラシを作成してチーム誕生の説明。活動の場の相談。

10.5 学区内小学校学校協議会に出席。活動の場の相談。

10.6 職場内研修(必修)「車いすの基礎」

10.6 近隣小学校での避難所運営・防災訓練で「車いす体験」コーナーを担当。チームデビュー。

10.7 納涼祭「車いす体験コーナー」担当。  
\*8月には、学区内小学校のサマースクールで「車いす体験」の講座を担当予定。

\*チームは出入り自由。互選によるリーダーや広報、企画、物品設備等役割分担で運営。

\*チームの活動はホームの事業として位置づけ。

《取り組みの結果と評価》

現時点での主な取り組み成果を挙げる。

①チームを作ったことで、職員が介護ノウハウを持って地域に出向く手段を得ることができた。

②挨拶、打合せ、反省会等、職員が地域の会合に出席する機会ができ、接点が多くなった。

③「上北沢ホーム職員」としてチーム(組織)で出向くことで、ホームの存在や役割を知っていたと発信効果があった。

④体験を通して、様々な世代の様々な興味や質問に具体的に答えることができた。

⑤車いすに関することに留まらず、地域住民の介護への関心やニーズの多さや多様さを知ることができた。

⑥職員が職種を超えて連携協働する機会が増えたことで施設内チームケアもより円滑になった。

⑦大学との日常的交流が定着し、利用者が大学に招かれ行き来したりしている。

⑧車いす体験参加家族が「私たちにも何かできることはないか」とボランティア申し出。現在週1回来訪、ホームの人気イベントに発展。

《まとめ》

特養(利用者、ホームという存在、職員)と地域住民や組織が、顔の見える関係でつながっていく手助けを、車いす体験を通して強く感じた。

この関係を紡いでいくことで、特養も地域の一員として、起こる課題に対して速やかに役立つことができる、頼りになる存在になれるのではないかと。今後も積極的に地域に出ていきたい。

《提案と発信》

私たち上北沢ホーム職員には、ここで暮らす利用者一人一人の尊厳を守る使命があります。一方、上北沢ホームは地域の一員です。施設自体が地域にとって役に立つ存在になれるよう、まず第一歩として、私たちは、特別養護老人ホームについて、また介護について、広く知っていただくことが大切だと考えています。

【メモ欄】追加資料 有 無